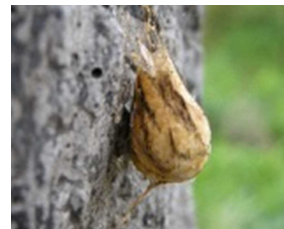


残るものは少数

1. クモの子

4月に入ると植物が芽生え、食料の豊富な時期に一人前に成長させてしまうため動物も子どもが生まれます。クモは冬に孵化した子グモがそのまま冬を越す種と春に孵化する種があります。孵化後の子グモの特徴は、集団を作って生活するという事です。クモは卵をまとめて産み、それをたくさんの糸で包み込んだ卵嚢というものを作ります。

孵化した子グモは卵嚢の中で、1回脱皮します。その後外に出てくるのですが、独立して生活することなく集団を作ります。これを円居(まどい)と呼びます。「まどい」に手を触れたり、驚すと、一斉に四方八方へと散ります。



まどい

昔からこの状態を「蜘蛛の子を散らす」という言葉で表現してきました。時間が経つとまた元の状態に戻ります。

「まどい」には糸が張ってありますが、餌を捕獲する網ではありません。卵の時から持っている卵黄で栄養をまかない、さらに2度目の脱皮をします。この後、餌をとって自活できるようになるため、個々に別れて行きます。移動の手段は糸を使って空を飛ぶことです。着地した場所で生活を始め

ますので、家の周辺でいつの間にかクモが網を張っているということが起るのです。

1卵嚢で数百匹も子グモが生まれますが、大きくなったクモの数はそれほどでもありません。昆虫を捕まえて食べるクモですが、ベッコウバチなどの狩人バチに餌とされますし、小鳥類もクモは重要な餌生物です。子どもが一人前になるということは難しく、産卵数はそれを見込んでいます。

2. 芽生え

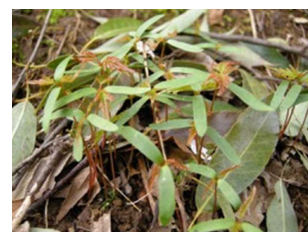
早いものは3月の末からいろいろな植物の種が発芽してきます。種子が遠くまで飛んでいけばよいのですが、集まってしまう場合もあります。一面同じ子葉が並ぶところにも出会います。

これらの成長状況の観察を続けると過酷な生存競争が見えてきます。一斉に発芽した半年後、1年後とだんだん個体数が減ってきます。長いものでも数年でほとんど姿を消します。樹木は種子が大きく栄養を持ったため2年目まで持ちこたえるようですが、種子の小さい草では秋には全滅に近い状態です。

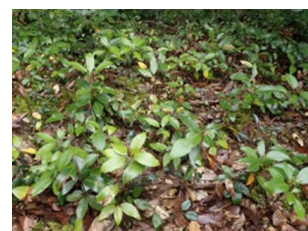


ミツバ

その原因は、まず同時に芽生えた仲間たちの水や栄養、光の奪い合いです。ちょっとでもより大きくなったものが光を奪い勝者となります。しかし、周囲にいる大型の他種も、自分を産んで



イロハモミジ



タブノキの稚樹群

くれた親も競争相手となり、勝つことはできません。いかに親から離れるかも大切なことです。

したがって、春になって一斉に発芽することは、子孫を残す上では不利な性質です。性質の違う子どもができ、発芽時期がバラバラになることも重要なのです。小さいままで親が倒れるのを待ち、明るくなってから成長する。こんな場所がありますので探して見てください。